

平成27年1月31日(土) 於高崎市市民活動センターソシアス

高崎学検定シンポジウム 基調講演

石碑が伝える郷土の歴史～道しるべ・俳諧句碑・筆子塚

和田健一(多胡碑記念館)

はじめに

講演の目的 ①江戸時代(近世)の石造物(金石文)から、当時の識字率・文化の高まりをあらためて確認すること。②郷土の歴史探究の楽しさを学ぶ。

1 碑とは

(1) 碑:「豎(た)てたる石なり」(『説文解字』)

①「碑」とは基本的に石製である。「碑」は朽ちてしまう木製や、錆びてしまう金属製ではない。石材を加工する事によって造立された「碑」は、それを破壊するという行為でもなければ半永久的に不滅である(と建立者は考える)。

②過去の事跡を記しているもの。

①+②=不滅な「碑」に過去の事跡を彫りつけるもの。建立者にとって重要な内容

(2) 金石文

紙や布に書かれたもの以外の「文」を「金石文」という。古代中国における金文が鑄こまれた青銅器や、刀工の銘が彫られた日本刀、戒名が刻まれた墓石も、全て金石文である。今回は江戸時代に建立された道しるべ、俳諧句碑、筆子塚の石造物を扱う。

←石像物(石仏・庚申塔・狛犬)

(3) 失われつつある文化財

失われる理由①自然災害(風水害・地震・津波・火山噴火)

②人為的理由、火災、紛失(盗難)、戦災、開発(価値の低さ)

2 石造物建立の背景

近世(江戸時代)の石造(像)物は、中世に比較して数が多い。時代が新しいため、数多く残っている。幾つかには筆者や石工が判明するものもある(ほとんどが不明)。

(1) 徳川の平和

・国内的: 島原天草一揆(寛永13~14年/1637~38)~戊辰戦争(1868)、もしくは第1次長州征討(1864)の約220年間、内乱・内戦がなかった。

・国際的: 豊臣秀吉の慶長の役(慶長2年/1597)~日清戦争(明治27年/1894)の約300年間、対外戦争は起きていない(台湾出兵を除く)。

・近代日本が、幕末(薩英戦争や戊辰戦争を含む)~アジア・太平洋戦争の約80年の間に、およそ8度の内戦・紛争・戦争を体験したことと対比的。「世界史上まれにみる徳川の長期の平和」+鎖国政策

→庶民の長期にわたる定住生活、全国で町・村・家づくり、「家」の成立

→国内の経済活動を刺激、文化の創造。

史料1 佐野屋孝兵衛家家訓⁽¹⁾

一、東照大権現 此御神之御恩沢ニ而泰平之御代ニ相成、如此之渡世も相成且
楽ミもいたし今日無事ニ暮し難有事可思知也

(訳：東照大権現(徳川家康)のおかげで、平和な世の中になり、商売もできて娯楽もあり、今日も無事に暮らすことができるのは、ありがたいことだと常に感謝しなければならない)

史料2 六十六部廻国供養塔(高崎市吉井町多比良)



正面 六十六部廻国成就

右面 天下泰平 寛政元乙酉年十一月朔日

左面 国家安全 願主 當邑太七

◎平和に対する恩恵を、常に意識する庶民の心構えがうかがえる。

(2) 石造物と識字率の関係

識字率：①読み書きできる、②読めるが書けない、③自分の名前のみ書ける、④全く書けない、などの段階がある。このうち④以外を「自署能力」といい、その率を「自署率」という。村の名主を投票で選ぶ「入れ札」は、その対象者が家の戸主であり、一つの目安でしかなりえない。

江戸時代の初等教育は寺子屋(民間の初等教育)が担った。公権力(幕府や藩)には設置義務がなく、積極的ではなかった。昌平坂学問所・藩校は幕臣や藩士のもの。

・識字率を知るもう一つの手がかり→「金石文」「石造物」

◎村の成立と経済的豊かさの中から、人々は石造物建立の「余力」を得た。石造物を路傍に建てる行為→ある程度の文字を解する人間の存在を前提にしている。石造物の増大は、生活の質の向上、識字率の上昇も示唆していると考えられる。

3 道しるべ(道標)

今までの道標研究は、古道復元の手がかり。(萩原進氏等の研究)

庶民文化研究上は、最も不確定多数の人々を意識したもので、識字率の目安になる。

・上州の事例：寺社参詣→地名(特に温泉)を記す。旅が宗教者→公用の事務連絡、商用や運送、湯治を含めた観光目的へと変化。

公権力による設置義務がなく、民間による建立。旅行者の増加と比例して道しるべの数も増加。木標から石造物へ、文化的に高度なものへ。

史料3 恵宝沢の道しるべ（安中市東上秋間）安中市指定史跡



正面 延宝六年 上秋間村
住人真砂吉久
梵字（阿弥陀如来）南無阿弥陀仏
これ□みなみみやうきみち（□=より合字）

※年代が判明する県内最古の道しるべ（延宝6年／1678）、「南 妙義道」
榛名神社と妙義神社を結ぶ参詣道に建立

史料4 三国街道の道しるべ（高崎市下小鳥町）群馬県指定史跡



正面 ぬまた さはたり
右越後 いかほ 志 ま 道
くさつ かわらゆ
左 は る な 道

※ 地名のほとんどが温泉地、湯治関係の旅行者が多かったことをうかがわせる。
湯治は、農閑期の休養、医療、観光

史料5 井出の道標（高崎市井出町）



正面 昭和御大典記念（題名）
（題名下）
伊香保路や井堤野が原の庚申塚
伊香保に三里赤坂江二里
伊香保路の井堤野に咲きし女郎花
色ゆへ人につまれけるかな
古里伊香保道者のよまれし歌 梅園翁
小林翠石刻

※建立者、石工がわかる道しるべ。昭和3年（1928）の昭和天皇即位を記念して建立。

「梅園翁」とは、箕輪城や長野氏の研究で知られた井出の郷土史家・斎藤平治郎のこと。

4、俳諧句碑から見えるもの～白井鳥酔

江戸時代に盛んになった文芸として、漢詩・和歌・俳諧・狂歌・川柳があった。俳諧は「五七五」に、生活に身近な対象を詠み込むもので庶民が親しみやすかった。

句碑：今までは鑑賞物として、一般の文学碑と同様の捉え方、庶民文化研究では、追善供養塔、俳諧宗匠への参り墓→立地が巧妙に計算されている。師匠の本墓以外に、ゆかりの地ごとに句碑が営まれる例がある。碑の擬人化や見立ても行なわれ、俳諧社中の特定など、近世俳諧の史料としても、有効な活用が可能である。

・上総国出身で全国に蕉風俳諧を広めた白井鳥酔の句碑の事例

白井鳥酔：江戸で立机して俳諧結社「松露庵」、品川海晏寺に「松原庵」を開き、大磯嶋立庵3代庵主を務める。上州にも数回立杖し、高崎から利根沼田方面の三国街道沿いに門人が多い（羽鳥麦舟・一紅夫妻も門人）。よって鳥酔没後には、本墓（宝篋印塔）が故郷上総国地引村に建てられたが、上州で追善供養が営まれた際に句碑が建てられている。その立地は全てゆかりの地（庵主、滞在、句集を編んだ）であり、碑面の句に対応させるため、慎重な選地が行なわれている（史料6・7・8・9・14）。

史料6 白井鳥酔宝篋印塔（千葉県長南町明覚寺）鳥酔本墓

基礎部(正面) (二行の銘文が見られるが摩滅して不明)

同(左面) 明和六己丑天 四月四日

安永二己巳天 五月四日

同(右面) □□□□□上於□

□□□□□寺□卒

□□三分而□□相

□大磯駅□澤嶋立

庵當埋此□処矣

同(背面) 俗名 白井喜右エ門 信□(興力) 石工 浅田 三十尾 義□

史料7 露柱冢（千葉県長南町正善寺）千葉県指定史跡《七回忌法要》



正面 露柱冢（行書）

古国尔歸し遠葉あり

涼志さや 鳥酔翁

むかしへも登る

夢乃橋（草書）

左面 白井氏三瓦樹立

右面 安永四乙未龍集四月四日

東都龍齋山維碩書

※龍齋山維碩は、建部巢光（加舎白雄の門下で俳画で著名）の父で、高名な書家。

史料8 松風塚（東京都品川区海晏寺）東京都指定史跡



正面 松風塚遺章
松風の骨になつたる寒さ哉 鳥酔居士
左面 龍齋嶺碩
背面 明和第六己丑歳次四月四日 松露菴社中
合資樹立
※ほか、嶋立庵の追善供養碑も同型の碑である。

史料9 万日堂の涅槃句塚（高崎市下豊岡町万日堂）高崎市指定重要文化財



《七回忌法要》
正面 於もしろひ ゆめみるかほや 涅槃像
露柱堂鳥酔居士
背面 安永四年乙未春 椿山田忠書
高崎驛 四岨菴連

史料10 鳥酔七回忌記念句集（安永4年4月刊）『はいかゝ（俳諧）涅槃像』叙文

「爰に四弁庵のあるし我昆弟にして、師に仕ひ奉るに硯席を同しうす（中略）同じ江都にこゝろさしをひとつにして（中略）往し壬辰きさらき、丙丁童子の怒にあふて、庵は灰燼となせしより（中略）上毛なる高城の風土、語竹庵のあるし疎節雅子、文を飛してむかふ、孚石もとより無分別に諾して、これに背かず、遊袋を荷ふて語竹窓下に入る事、かりそめなから四とせ、此夏や師の休息にあたりとて、そこの詞友こゝろを資あふて（後略）」

○鳥酔の七回忌に際し、四弁庵孚石を中心とした追善集。鳥酔「涅槃像」の句を受けた孚石以下36吟がある。松露庵三世鳥明・叙「（高崎）城西からす川の江岸下豊岡邑中常安寺境内万日堂前の芝生のみとりなる地に」「まことにその所を得たるにや（略）一簣の土をもて師の遺骨、ならひに款曲一片を添へて瘞蔵す（略）」
その他、高崎田町の分江・一紅・野鶴（麦舟）・雨什（松露庵四世・平花庵）・高井東水（平花庵二世）・鳥明・土竜庵杉坂百明・加舎白雄などの名が見える。

5、俳諧句碑から見えるもの～松露庵と語竹庵

史料 1 1 西谷養俊墓碑（高崎九蔵町大雲寺）

正面 廣生館先生西谷氏之墓

左面～背面～右面に碑文有り

「平常無他嗜好唯好諧歌述懷時之出能語遺稿有一冊」

養俊は正徳4年（1714）に江戸に生まれ、廣生館と号し、幕府医官曲直瀬養安院に師事した。後年、養俊は高崎藩医として知られ、天明2年（1782）に没した。養俊の俳号は「疎節」で、『はいかみ涅槃像』の立生舎周廣による跋文に「序は疎節君玉の声あるからくにのふミして、めでたく述給ふ」とある。養俊の子宗叔も藩医であり、俳号「亦醉」を名乗って語竹庵を継承した。

高崎を地盤とした俳諧結社「語竹庵」については不明な点が多いが、奥州もしくは下総国出身の蚕種商人「塚原海鳥」を語竹庵一世、高崎田町の商人「本木鳥梭」が同二世とされる。海鳥・鳥梭については鳥酔一門の年次集『天慶古城記』宝暦5年（1755）で見ることができる。

史料 1 2 『天慶古城記』（天理図書館蔵本）加藤定彦他（1997）『関東俳諧叢書』より

（前略）物音にまきれぬ闇やほとゝきす 鳥梭

明行や蛍の闇は草の中 海鳥

右高崎語竹庵連 （後略）

史料 1 3 鳥梭墓（高崎市新後閑町莊嚴寺）上部に如意輪觀音像（墓碑には「鳥梭」）

正面 悟岳院竹峯得庵居士

進窓本有妙精大姉

右面 悟天明六^{丙午}八月初五日

進延享二^{乙酉}年六月朔日

左面 辭 たのしみや花野乃中越

世 ひとりたひ

語竹庵二世 鳥梭

鳥梭墓台座部分 五角形の台座に竹の浮き彫りが見える。

墓石は正五角柱で、上に石造仏（台座蓮弁の種字は觀世音菩薩）が乗る特異な形状である。全高は150cmに及び、本木家の墓所の中でも目をひくもので、墓石に合わせた五角形の台座（正五角形）には竹の浮き彫りが見える。「五角形」＋台座「竹」＝「語竹庵」。鳥梭が風流人で洒落た人物であった事が想像される⁽²⁾。

史料 1 4 鳥酔翁冢（渋川市中郷双林寺山門前）群馬県指定史跡

正面 鳥酔翁冢

碑陰 1 明和六己丑歳四月四日

卒今以翁之齒并当山



之吟虫聲之短冊瘞於此

干時安永八巳亥八月

碑陰 2 僧に法無しにこゑあり夜母すがら

小見鳥路 小菅右龍 志羅雄坊建

※志羅雄坊は信州上田の俳人・加舎白雄白雄は師の松露庵烏明から破門され、立碑の翌年2月に江戸で春秋庵を開く。

※※亡き師白井鳥酔の愛した白井の地、白井氏と白井城（鳥酔『俳諧白井古城記』）⁽³⁾

・双林寺学僧の読経→虫の声（夜もすがら）→師への供養碑 虫の声＝八月の建立（秋）

6、筆子塚

（1）寺子屋とは

僧侶・神官・医師・名主などが、寺社や自宅で「読み書きそろばん」を教授、学習進度に合わせた完全個別指導、農繁期を除く季節教授、謝礼は多くが形式的。親たちは、子どもが一人前になれるよう、寺子屋でしつけと儀礼を身につけさせ、更に「知」を学ばせた。子どもが無事に世の中を渡っていけるように養成する「民間の初等教育機関」が、寺子屋であった（柳井久雄氏・森田秀策氏・高橋敏氏等の優れた研究）。

史料 15 子供礼式之事（駿河国駿東郡吉久保村）湯山文右衛門寺子屋塾則（原文より順序を改変、一部略）

- 一、着座畳に手をつき額をさげて心静に礼いたし席ニ先々よりすわり可申事
- 一、十より内の子供茶番無用之事十一歳より可勤事
- 一、素読仕舞候而復し先香二本之内急度ふくし可申事
- 一、大小便老人宛限り可出事
- 一、無断他へ出申べからざる事
- 一、友達は皆兄弟同意ニ候睦敷互ニ行義正し幾末迄之親ミ可申候事
- 一、喧嘩口論ハ皆自分之悪ゆへ内々親々取上ざる事
- 一、親類縁者之入来之節急度逢対可致事
- 一、朝寝すべからず手水遣ひ候ハ、まづ天道を拝し我が先祖を拝し可申事⁽⁴⁾

（2）筆子塚の建立

寺子屋・私塾の師匠の墓碑・顕彰碑等で、師匠の没後（生前もあり）に、追善供養や顕彰目的で建てられた。建立者は、親族と筆子（門人）であり、「筆子中」「筆弟中」「門人中」「門中」とあり、他の墓碑等と判別できる（近藤章氏・中村茂氏等の研究）。

史料 16 吉田庄左衛門筆子塚（高崎市下小鳥町蓮華院）

正面 天明元辛丑歳
本阿浄心信士
五月二十九日
右面 造立者筆子六十人
左面 俗名吉田庄左衛門 行年七十貳寂

※寺子屋の詳細は不明

史料 17 法印自覚筆子塚（高崎市下小鳥町蓮華院）

正面 法印自覚位
右面 弘化二乙巳十月廿一日
當所青木氏産
左面 法類筆子造立

まとめ 石碑調査の意義と郷土史の楽しさ

【意義】埋葬当時は親族や多くの筆子が葬儀に参列し、手厚く葬られた筆子塚でも、家が絶えればもちろん、檀家が存続していても、遺族や寺院の都合など、様々な理由で失われる運命にある。一方、地域史研究は、為政者から庶民の歴史・文化へ方向を向けつつある。その貴重な史料である石造物の調査・記録・保存は緊急を要している。

【楽しさ】後世に伝えたい身近な歴史こそ早く埋もれてしまう。石碑調査は、徒歩や自転車で行なうのが最も良い（昔の人の速度）。健康的でお金もかからず環境にも優しい。文書史料と違い、石碑は誰にでも見られる史料。あなたの周囲のあちこちに歴史は埋もれている。高崎にはまだまだ大いなる魅力が秘められているのである。以上。

(1) 入江宏（1995）『近世庶民家訓の研究』多賀出版。

(2) 拙稿（2011）「近世上州俳諧句碑の検討 - 柳居・鳥酔を中心に」『群馬文化 305 号』所収

(3) 拙稿（2012）「白井鳥酔と句碑の検討」『群馬歴史民俗 33 号』所収

(4) 高橋敏（2007）『江戸の教育力』筑摩書房、67～70 頁